

社会的認知度を上げたい な情報を省略するのが絵

対
談
リ
レー

動物図鑑や専門書の絵を描く仕事がい
獣医学部就職活動で絵を描く仕事はないと言われ
面白そうな医療の研究所で豚と関わり
絵の必要性に直面しメディカルイラストレーターを志す
論文では文章が重視され絵の価値は二の次
美大や藝大出の描く絵は美しい、が

tokco 氏
メディカルアーティスト

現在日本で獣医師国家資格を持つ唯一のメディカルアーティスト。特に解剖学、サージカルドローイングを得意とする。カーデザイナーの父よりアートの世界の厳しさを知らされ、美術大学進学を一旦保留。2006年獣医師免許取得、神戸市の医療機器関連企業に就職するも医療関連のイラストレーションに対するリテラシーが日本では非常に低いことを知り、その重要性を広める事を使命と感じ2008年辞職。2013年株式会社レーマン設立。医療機器メーカー、出版社、全国の大学等からの依頼を受けイラスト制作の傍ら、メディカルイラストレーターの社会的地位向上、認知度拡大のためのイベントや啓蒙活動を実践。現在に至る。

メディカルイラストレーターの重要なポイントを解り易く不必要

田上佑輔氏

医療法人社団やまと理事長

1980年、熊本県生まれ。東京大学医学部卒業後、千葉県国保旭中央病院の研修医を経て東京大学医学分付属病院腫瘍外科に入局。東日本大震災での災害医療ボランティア活動を機に2013年に宮城県登米市と東京にてやまと在宅診療所創設。現在・医療法人社団やまと理事長。2017年に都市⇄地方の「循環型」キャリアモデルとして「やまとプロジェクト」を発足。毎週宮城と関東を行き来し、診療以外にも地域住民や行政と関わり、登米市の地域包括ケアアドバイザーを務める。各地でこれからの在宅診療・地域医療についての勉強会、講演を行っており、多数のメディアにて活動が取り上げられている。

様々な情報を仕入れ精査し科学的に正しい絵を描くことが重要
専門学校を卒業後ビジネスとして成り立つか
単価を下げず、クオリティの均一化を目指す組織を
アニメや3Dと2次元の絵は共存してゆく
世界から日本が後れを取らないように
もっとメディカルイラストレーションの普及と啓蒙活動をも

獣医師の知識をベースに 医療分野のイラストを描く

田上 対談のお相手に指名させていただいたのは、メディカルイラストレーターのtokco（とっこ）さんです。tokcoさんは獣医師の資格をお持ちで、ご自身で医療専門のイラストレーションを描きながら、日本ではまだまだ認知されていないメディカルイラストレーションを広める活動もされています。

tokco 田上さんと初めてお会いしたのは、4年ぐらい前ですね。

田上 そう、異業種交流会で、それ程人数も多くなってゆつくりお話しできましたし、今も時々お会いしています。そのような集まりでは、何か新しい事を始めようとしている30代の人が多いのですが、中でもtokcoさんは印象的でした。それまで獣医さんと言うのは動物病院で働いているイメージしかありませんでした。獣医師というバックグラウンドがあつて、獣医師の知識を活かしながらイラストの仕事をしていると聞いてとても驚きました。そのマインドセットや見方も、獣医というのを超えて人間とし

て魅力的だと感じています。

tokco ありがとうございます。

田上 メディカルイラストレーターという仕事自体、殆どの方がご存じないですよ。でも、素晴らしいお仕事だと思います。幼い頃はどんなお子さんでしたか？

tokco 動物好きで飼育もしていましたし、絵を描くのも好きでしたね。図鑑に載っている絵の模写などをよくしていました。

田上 獣医になろうと思ったのはいつ頃ですか？

tokco 動物図鑑や専門書の絵を描く仕事をしたという気持ちからベースにあつて、小学生の時には決めっていました。からだのしくみを学んでその知識を活かしてイラストを描く、そういう仕事があると思つて獣医学部に進学しました。

田上 動物の治療や手術に興味はありますか？

tokco 獣医は公務員になることもありますが、動物病院でペットを診ること同様に興味がありませんでした。とにかく、図鑑の絵を描く人になりました。

田上 絵を描く人と獣医さんがつ

ながるとは思いませんでした。絵は美大とか芸大のイメージですが、そこに専門性があるというのがすごく面白いですね。

tokco 父がカーデザイナーで、小学生の頃に「美大に行つてもその先はかなり厳しい世界だから、まずは何か専門を身に着けなさい」と言われ母からも『女性も手に職を』と言われ続けていましたので、動物が好きだし、獣医を目指すことにしました。

田上 獣医学部からメディカルイラストレーターの道に踏み出したのはいつ頃ですか？

tokco 大学卒業を控えて就職活動で教授に相談したら「そんな絵を描く仕事はない」と言われて驚きました。そこで「実家から近いところに医療系のおもしろそうなベンチャー企業がある」と紹介してもらったのが、豚を使って実験をしたりする医療の研究所でした。そこで研究に関わっている時に、絵がないと難しいというシチュエーションに何度か直面して、改めてメディカルイラストレーションの仕事をしたと思うようになりました。

田上 tokcoさんが研究所に入

る迄はどなたが絵を描いていたんですか？

tokco 医師や研究者が集まる場所でしたが、必要な時は少し絵の得意な身近な看護師さんやメーカー内の社員さんが適当に描いたものを持つてこられていました。

田上 適当で大丈夫ですか？

tokco 外資系のかかなり大きな医療機器メーカーさんでさえも、手描きの適当なものを見せてやっていましたね。

田上 海外ではいろんな国の人が見てわかる絵に拘る人が多いのですが、日本の医療界や生物の分野では絵は評価されていません。プレゼンテーションも全て文章で、どちらかというと文字での表現の方が重視されていますね。

tokco 海外ではビジュアルにかなり力を入れていて、論文にもすごく美しい絵が使われていますが、日本では絵にポイントが置かれていませんでした。

田上 今でもそういう傾向ですか？

tokco 最近は少しビジュアルにも拘りを持つ企業やドクターが増

えてきています。論文も美しく、解り易くないと「書き直しなさい」とリジェクトされることが多々ありますので、少し意識する方が増えたように思います。

田上 プレゼンテーションも変わってききましたね。昔はパワーポイント等もなかったので、決まったフォーマットでスライドを見せる程度で、ビジュアルよりも文字が重要でしたが、最近ほとんど写真が出ますね。私は元々外科医でしたので、手術に関しても言葉で「肝臓は……」と言うより「これが肝臓です」とビジュアルで示した方が解りやすいし、意識は確実に変わってきていますね。

tokco 日本では、プレゼンテーションの際、先生が撮った動画をそのまま流すことが多いのですが、海外では動画を流しつつも、写真ではわからない箇所を絵で表現するなど、拘りを持っている方が多いですね。

メディカルイラストレーションのプロとして自立する難しさ

田上 tokcoさんがメディカルイラストレーションを志した頃は、そういう意識をお持ちの人は少なかつ

たんですか？

tokco イラストに対して意識の高い医師やメーカーの方もおられました。どこに頼めばいいのか全く分からなくて、身近な絵の上手な人に頼む程度で、仕事にもならないような環境でした。やり始めた頃は10人程度だったと思います。

田上 現在は何人ぐらいですか？

tokco メディカルイラストレーションだけでやっていける人は、おそらく10人から20人、企業の中で医療関係の絵を描いている方も含めば50人ぐらいでしょうか。

田上 ビジネスとして成立するの、現状はいかがですか。

tokco 私自身は、獣医師でオペの経験もあつてのブランディングを何年も頑張つたので、ある程度思うように交渉出来るようになりました。周りの仲間を見ると、イラストレーターの肩書きだけではかなり厳しい状況です。まだまだプロの職業とは認められていないと思います。単なるイラストレーターという扱いではオペ室に入ることも難しく、医療現場のことを知らないとおペ室で邪魔になつたりします。メディカルイラ

ストレーターに対する教育も必要だと思えます。

田上 その点はなかなか難しい問題ですね。「メディカルイラストレーター」という入口で、絵が上手な芸大の人なのか、生物学的に理解をしている人なのか、それともCGとかIT系で写真の加工ができる人なのか、様々なパターンがありますね。tokcoさんの様に解剖や生物や医療がわかっている人がいいのかな、とは感じます。ただ、それだと入口がすごく狭くなつてしまいますよね。

tokco そうなんです。でもそういうなると職業として広がらないので、一人で完結させるのではなく、知識がある人と絵が描ける人がチームになつて組織として活動するというシステムであれば成立するのでは、と考えるようになりました。

田上 しくみとして動かすには、協会の様なものが必要になつてくるかもしれませんね。

tokco 協会ではありませんが、丁度今、組織をつくらうと思つて、周りのメディカルイラストレーターのメンバーに声をかけているところです。ライバルではありますが、お互いに備

格を下げることで競争をさせては業界の底上げにならないので、クオリティの均一化を目指して組織化していきたいと考えています。

田上 レベルを上げていかないと、全体が沈んでしまいますよね。何を参考にして描きますか？

tokco メーカーさんやドクターから送られてくる写真や動画です。論文を読み、医学書で調べたり資料のリサーチも重要です。

田上 絵を描くだけじゃない大変な仕事ですね。

tokco 細密画ではないので写真そのまま絵にすればいいわけではなくて、様々な情報を頭の中で処理しながら科学的に正しい絵を描かなければなりません。まずは正しい情報を仕入れることが出来るかどうか、そこから精査して絵に落とし込むことが出来るかどうかです。美大出身の人は絵は抜群に上手ですが、情報精査の部分が弱いことが多いですね。情報の精査もメディカルイラストレーターに必要なスキルなので、そういうところからもトレーニングが必要だと思えました。

田上 入口をどう広げていくか、

更に志望者に対する教育も必要ですね。

tokko 今は、知識のあるメンバーが入ってきた情報を線画にして、他のメンバーにはトレーニングも兼ねて、説明をしつつ綺麗に仕上げるところや、さほど知識が必要ではないイラストを担当してもらっています。

田上 ご自身であれば最初から最後まで一人で出来ることを、今は分担してやっているのでですね。現在専門の学校はありますか。

tokko 2011年に岡山県倉敷市にある川崎医療福祉大学に医療福祉デザイン学科ができて、レオン佐久間先生というメディカルイラストレーターの方が教授として指導されておられます。ただ、一番の問題は卒業して社会に出た時にビジネスとしてやっていけるかと言うと、やはり壁があるのでそこを超えていきたいです。でも学べる場ができたので、少しずつ人材が集まり始めています。「専門性の高い技術を身につけて、就職率100%」となっていければいいですね。

田上 単価を下げるのではなく、仕事として成立する仕組みをつくる



ということですね。今、専門的に学べるのは倉敷だけですか？

tokko 金沢や北海道でも動きがあります。

田上 イラストは手描きですか。

tokko 現代はやはりデータのやりとりになるので、下絵を手で描いたあとコンピューターに取り込んで、画像編集ソフトで彩色をして仕上げます。私はコンピューターの使い方を全く知らなかったので、1年間専門学校で画像編集を勉強しました。

田上 作品を描いて営業をして、経営も全部自分でやって、業界ごと創ろうとしていてすごいですね。将来、知識も技術も身につけた人が増えて、在宅ワーク等仕事の仕方が広がって変化していく内で、そういう仕

事をしたいという人も増えていくでしょう。業界自体も、ヘルス系のいろんなビジネスに向けて的確なイラストレーションを出せる会社が増えて、プロモーションに使いたいという需要も増えて、タイミング的にはすごくいいと思います。仕事として成立している人は、現在何人ぐらいですか？

tokko まだ、数人です。10年ぐらいやっている仲間も頭打ちの壁が見えているので、次は「組織として解決しよう」と声かけをしているところですよ。

英米で必要とされても日本では広まらない

田上 今は会社組織で活動されていますが、個人でやっておられた時期

もあるんですか？

tokko 最初の5年間は個人で手探りでした。ただ、医療機器メーカーさんや大学からは、法人の方が依頼しやすいのとことで法人化しました。

田上 仕事場と住まいは一緒ですか？

tokko 去年までは別でしたが、今は引越して自宅で仕事をしています。法人化した時期が出産後すぐでしたので、背負って絵を描いたりしてとにかく必死でしたね。

田上 子どもを育てながら、仕事をしながら、業界を創ろうとして、本当にすごいと思います。他の人たちはやっぱり個人なので、自分の描いた絵がどれだけ高く売れるかが重要ですが、tokkoさんが目指すのはメディカルイラストレーターという仕事幅広く成立するようなどころまで視野に入れて育成まで考えた業界全体ですよ。

tokko 現在メディカルイラストレーター業界には、60代、70代の数人の大御所がおられますが、それぞれ個人で活動してきて、おそらく80年代の図鑑ブーム、科学雑誌ブームの時

にかなり活躍されたと思います。個人としては大成功した方ばかりですが、今、日本でこの職業が全く広がっていないことを考えると「何かやらなきゃ」という感じになって、教えを乞う事も増えました。

田上 師匠のような方はいらっしやいますか？

tokco 絵の技術を直接教えて頂いたり、メディカルイラストレーションの本場であるアメリカの情報を教えて下さるのは、サイエンスアーティストの奈良島知行さんです。他にも業界を一緒に盛り上げていこうと言って下さる先生は何人もいらっしやいます。

田上 奈良島さんとはどういう経緯でお知り合いになりましたか？

tokco 今は京都にお住まいですが、30年以上アメリカで活躍された60代半ばの方です。帰国された時に、「自身が渡米する前と業界が全く変わっていないことに驚いて、日本で何か活動をしなさいといけないと思われたそうです。子どもの理科離れが進んでいる、ヘルスリテラシーも日本はかなり低い、イラストは幼少期の教育にも必要、等々・・・と言う事から



2010年にサマースクールを始められ、その初回に参加したのが奈良島さんとの出会いです。

田上 海外に行ったからこそ日本の現状が見える、というところもあるでしょうね。ずっと日本にいたら、進歩していないことにも気づかなかつたかもしれません。

tokco メディカルイラストレーションはアメリカが本場ですが、イギリスでもメディカルイラストレーションの専門部所のある病院が30程あります。イギリスには日本の皆保険制度に似た「NHS」という制度がありますが、その理念の中に医療従事者が患者さんに解るようにしつかり説明しなければならぬ、と書かれています。国民には自己管理は義務であ

るといふ認識もかなり根づいていて、医療は無料で受けられますが病院を選ぶことは出来ません。

田上 エリア毎に「ファミリードクター」が決まっていて、まずはそこにかからないといけないんです。かなり混んでいるし、日本で最近言われている「かかりつけ医」に近いのですが、日本のように自分で選ぶことはできません。

tokco 自分の事をきちんと伝えないといけないので、イラストはじめ様々な情報源からかなり勉強していますし、病院もイラストリッチなものを見せて説明します。アメリカでは、メディカルイラストレーターは100年以上の歴史がある仕事で、日本とは全く環境が違います。

田上 留学する人は多いですか？

tokco 友人にも、アメリカに勉強しに行った人はいますが、せっかくがありませぬ。それがすごくもつたないです。

田上 アメリカにはメディカルイラストレーションを勉強できる場所が沢山ありますか？

tokco 大学院としてコースがある学校は9校あります。

田上 日本に戻ってきた人が、いかにメディカルイラストレーションの世界を広げていくか、ですね。ただ、日本もビジュアルの社会になってきていますから、今後は需要も高まってくるでしょう。

tokco 医師の立場から「イラストがあるといいな」と思われることはありますか？

田上 コミュニケーションの面でイラストが有用だと感じることは多々あります。海外では、人種、カルチャー、言葉、アクセントが異なる人たちが同じコミュニケーションの中で暮らしていて、言葉で説明するのが難しいので、絵で見せて指差して説明しなければなりません。日本人は「先生に

任せておけば安心」という人が多く、「まあ、大丈夫だから」と言うだけで成り立ったりもしましたが、最近

は結構複雑になってきています。今後は益々患者さんの選択、リビングウィル、自分の意思決定支援をしていく

という方向性になっていくので、確実にイラストが必要になってくると思います。尚且つ、今までは「対人間」で

説明していた事をITに置き換えようという動きもあつて、そこには文章が長々と出るよりイラストがパッと

出てきた方が解り易いですよね。医療界のスピード感と、今コツコツ積み上げていくtokokoさんのスピード感がちょうどいいのではと、感じています。

tokoko 田上さんが患者さんにイラストを見せる時は、タブレットの様なものをお使いですか？

田上 うちには知り合いのデザイナーに描いてもらった可愛いイラストを入れて、紙のパンフレットを作っています。からだの構造や病気のことを説明するためのではなく、お家に帰ると家族と一緒に楽しい時間を過ごしながら治療ができますよ、と言うイメージを持つてもらうための

ツールですから、言葉は殆ど書いていません。

イラストでしかできない表現の価値を高めて広めていく

田上 今後裾野を広げながら、教育もしていく上でさまざまな課題があると思いますが。

tokoko イラストレーター自身の意識を変えていくこと、依頼者側の意識を変えていくこと、組織をつくっていくこと、その3つです。

田上 意識を変えると言うのはとても難しいですよ。

tokoko 何年もかけて少しずつ変わりはじめたかな、と思います。依頼して受け取った時に何が違うのか、実際に使ったらすごく良かった、というのを体験してもらわないと分かりません。イラストレーターは怖がって値段を下げてしまうので、依頼者とイラストレーターの間に入ってエージェントの様な役割交渉もしています。絵描きはビジネスのプロではないので、交渉は別の人に任せたい方がいいと感じていますので、そこにプロを入れる等して組織をつくりたいですね。

田上 何をしている時が一番楽しいですか？ ご自身で描いている時ですか？ それともビジネスとしてメディアカルイラストレーションに関わっている時ですか？

tokoko ビジネスとして交渉したり、イラストレーターのエージェンツの様なことをするのが楽しい時期もありました。今は、ドクターがどうしてもイメージ化出来ないものを、論文や言葉だけで受け取り、絵にして渡した時に「そうそう、こういう

事！」と言われた時が嬉しいし達成感がありますね。やっぱり描いている時は楽しいので、自分が描く時間をちよつと増やしています。

田上 一つのイラストを仕上げるのに、どのぐらいの時間がかかりますか。

tokoko ものによりませんが、大きなものだとリサーチから仕上げまで平均で2、3週間です。ただ、最初にいたたく情報の量によっても差が出ます。内容がかなり複雑なものに少ししか情報をいただけない場合は、「かなり時間がかかりますし、その分値段も高くなります」という事もきちんと伝えて納得していただいでい

ます。何度もやっている内に、交渉も大分慣れてきました。

田上 絵を見た時に「解り易い」と思ってもらうことが、医療に関わる人たちの意識改革につながっていくという事ですね。

tokoko 最近、論文が通らなかつたというので依頼を受けることが増えています。数年前までは、そういう依頼はありませんでした……。

田上 医療業界も狭いので、多分「イラストレーターの絵を使うといいよ」という話が浸透してきているのでしよう。

tokoko 依頼を受けた中で、「絵が指摘されて論文が通らなかつた」というケースが少し増えていて、描き直した後、「通りました」と言っていただけの嬉しそうですね。

田上 依頼が増えていく中で、メディアカルイラストレーターの社会的地位も確立出来ればいいですね。図鑑に出ている絵を見たことはあつても、専門に描く人がいるという事はまだまだ知られていません。社会的な認知度を上げていくための活動もされていきますか？

tokoko グロテスクではなく可

愛いく描いたパネルを使って、子ども達に食べ物が便になるまでの消化のしくみを物語風に紹介したり、メディカルイラストレーターという仕事を知ってもらうために大学で実践講座を開く等の活動も積極的に行うようにしています。

田上 これからは、医療従事者と患者さんのコミュニケーションでも、普段の生活の中でも、間違いなくメディカルイラストレーションが注目されるようになるでしょう。今は対ドクターという狭い医療業界で、自身が営業をされるので限界があるとありますが、実は子どもや高齢者など「一般の人が見て解かる」ところに大きなニーズがあります。今後は行政も企業も啓蒙活動をしていかなければいけません、将来的には営業専門の人材が必要になりますね。

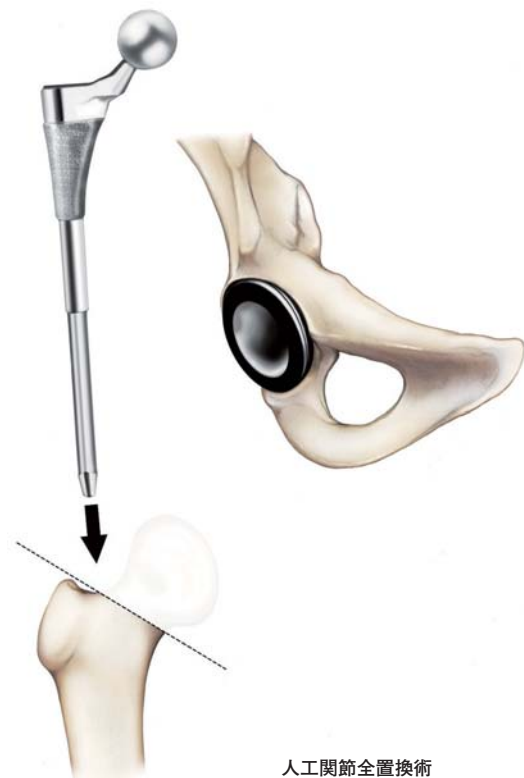
tokco 今は健康ブームですが、からだのしくみを解っているように解っていない人が多いと思います。女性特有の病気に対しても、日本人女性のリテラシーはすごく低く、知識もかなり乏しいのが現状です。性教育も海外と比べると全く遅れています。子ども向けのイベントで「子ども

が対象なのに、そんなことをやるなんて……」という反応が実際あって、解剖とか性教育はなかなか難しいですね……。

田上 そういうことも、グロテスクではない可愛いイラストで学べるようになると思います。今後は、ドラッグストアでお薬を自分で選ぶ機会が増えてきます。例えば、生理痛のお薬を飲む時に、それはお腹のどの部分で、どういう理由で起こるのかとか、イラストがある方が解り易いでしょうね。医療関連の情報を正しく伝えるには解り易い写真やイラストに、1000文字程度の説明の方が読んでもらえるし、結果的に伝わります。その時に、絵のイメージが正しく伝わるのが重要になってきます。

tokco メディカルイラストレーターのレベルが問われますね。実は最近、再生医療などでは分子レベル、バイオレベル、サイエンス系のプロの絵描きが必要になってきています。再生医療とかIPS細胞という言葉は知っていても、もつと簡単に噛み砕いた情報があった方がいいと思います。

田上 例えばがんの治療で抗がん剤を飲むとします。口から入った抗がん



人工関節全置換術

ん剤がどの様に効いていくのか、血管を通じて、免疫細胞の様なものができる、そういうものがアニメーションのようにビジュアルで見えると「これは効くな」という感じが伝わりやすいし、イメージも湧きやすくなるので、患者さんが安心するだろうと思います。点滴しているお薬がからだの中でどうなっているのか、イラストやアニメーションで「やつつけたー」というイメージは分かれますからね(笑)

tokco イラストレーションだからこそ出来る表現ですね。オペのビジュアルも、実際に開けて切除するという写真患者さんに見せても全く解らないので、病院からは「こういうオペをしました」と患者さんに伝

これから
メディカルイラストレーションの

田上 獣医師免許をお持ちですが、今後、獣医師として働くことは考えていますか？

tokco もともとペットの治療

には全く携わったことがなくて、研究施設で豚を扱った経験しかありません。ドクターが依頼する絵のオベをラボに見に行ったりしても、やっぱり豚が相手の仕事でした。これからも、獣医師の知識を活用しながらイラストを描いていきたいと思っています。

田上 子育てをしながら仕事をされているのですが、仕事以外で大事にしているのはどんな時間ですか？

tokko やはり娘と過ごす時間ですね。「何とかビジネスとして確立させたい」と突っ走っていた頃は、寝かしつけてからすぐ仕事場に帰って絵を描くような生活でした。頑張っている時間を取って向き合っているつもりでも、娘にとっては充分ではなかった様に思います。今は落ち着いて時間を取れるような仕事の仕方をしていきます。

田上 仕事にプライベートに多忙な毎日を送っていらつしやる中で、大切にしている言葉はありますか？

tokko 母が言っていた「人間万事塞翁が馬」という言葉が好きですね。

田上 一喜一憂せずにやっていく、と……。今、医療もどんどん進化し

ていますがアニメーションや3D、VRなども求められるようになっていきますか？

tokko アニメーションや3Dで表現する場合も、ベースとして2次元の絵の技術が必要です。医療の分野でも、実際かなり3Dが使われていますが、その素材としてのイラストは絶対必要ですし、3Dやアニメーションの需要が増えても2次元の表現がなくなるとは思いません。共存していくことになるでしょうし、私達が持っている知識や技術を基にITの技術者と連携を取るなど、広く対応していくことも大事だと思います。CTやMRIが入ってきた70年代から80年代に、アメリカでもメディカルイラストレーターが減ったことがあります。が、それでもやっぱり必要だということと、又需要が戻りました。

田上 2次元の表現とうまく共存していくことが重要ですね。最後にこれからの目標があればお聞かせ下さい。

tokko 今、実力のあるメディカルイラストレーターがビジネスの面でもとても苦労をしているので、落ち着いてきちっと仕事ができる様、営業や

エージェント、ブローカーがいるという組織として成立させたいですね。一般の人に向けた啓蒙活動にも力を入れていきたいと思っています。

田上 国民皆が健康について考える時代になりましたから、イラストレーションでのアプローチは届きやすいかもしれませんね。

tokko 今までは、医師やメーカーという狭いところを攻めていたのもっと間口を広げて、狭いところをもっと深めていくことも出来るかなと思っています。

田上 2020年には東京オリンピックがありますし、これからは外国の人が今まで以上に日本に来ます。ドラッグストアで日本の薬を見た時に絵で理解出来たり、医療機関で診察を受ける時でもイラストを通じてコミュニケーションが取れるようになることは必要です。高齢社会で100歳まで生きる時代になれば、道を歩いていて急に体調が悪くなった、胸が苦しくなったということも増えてきます。ここにAEDがあつて使い方はこうです、というイラストが役に立ちますよね。

tokko 危険な事、困った時の

事だけではなく、健康について前向きなトピックを絵で提示していけたら嬉しいですね。現在アジアのメディカルイラストレーションの業界は、中国と韓国に広がりがつあります。実は今まで、アジアはあまり意識していなかったのですが、このままだと日本が大きく後れを取ってしまうのではと危機感を抱き始めています。

田上 tokkoさんの活動が今後ますます重要になってきますね。

tokko メディカルイラストレーションの普及と啓蒙に向けて、しっかりと活動をしていきたいと思っています。

